金沢横丁道標四基

天明3（1783）年／天和2（1682）年／
文化11（1814）年／弘化2（1845）年　旅籠（旅館）
市登録地域有形民俗文化財［平成元（1989）年12月］

この地は、旧東海道と金沢・浦賀往還「かなさわかまくら道」の交差点で金沢への出入口にあたるため通称「金沢横丁」と呼ばれた。金沢・浦賀往還には、弘明寺、円海山、杉田、富岡などの信仰や観光の地が枝道にあるため、道標として四基が建立され現在も残っている。

1　「円海山之道」（天明３（1783）年銘）、左面に「かなさわかまくらへ通りぬけ」。建立者は保土ヶ谷宿大須賀吉左衛門。円海山は「峯のお灸」で有名だった。

2　「かなさわ　かまくら　道」（天和２（1682）年銘）、左面に「ぐめうし道」（弘明寺道）。

3　「程ヶ谷の枝道曲がれ梅の花　其爪」（文化11（1814）年銘）。句碑を兼ねた道標。作者の其爪は江戸の人で河東節の家元。

4　「富岡山芋大明神社の道」（弘化２（1845）年銘）建立者は柳島村（現茅ヶ崎市）の藤間氏。芋明神は、富岡の長昌寺で、ほうそうの守り神として信仰を集めていた。

保土ケ谷本陣跡

主屋：大正 14 年建築／木造平屋建／洋館付き住宅
門：建設年不詳／木造平屋建／冠木門
蔵：大正 12 年建築／鉄筋コンクリート造２階建／土蔵風倉庫

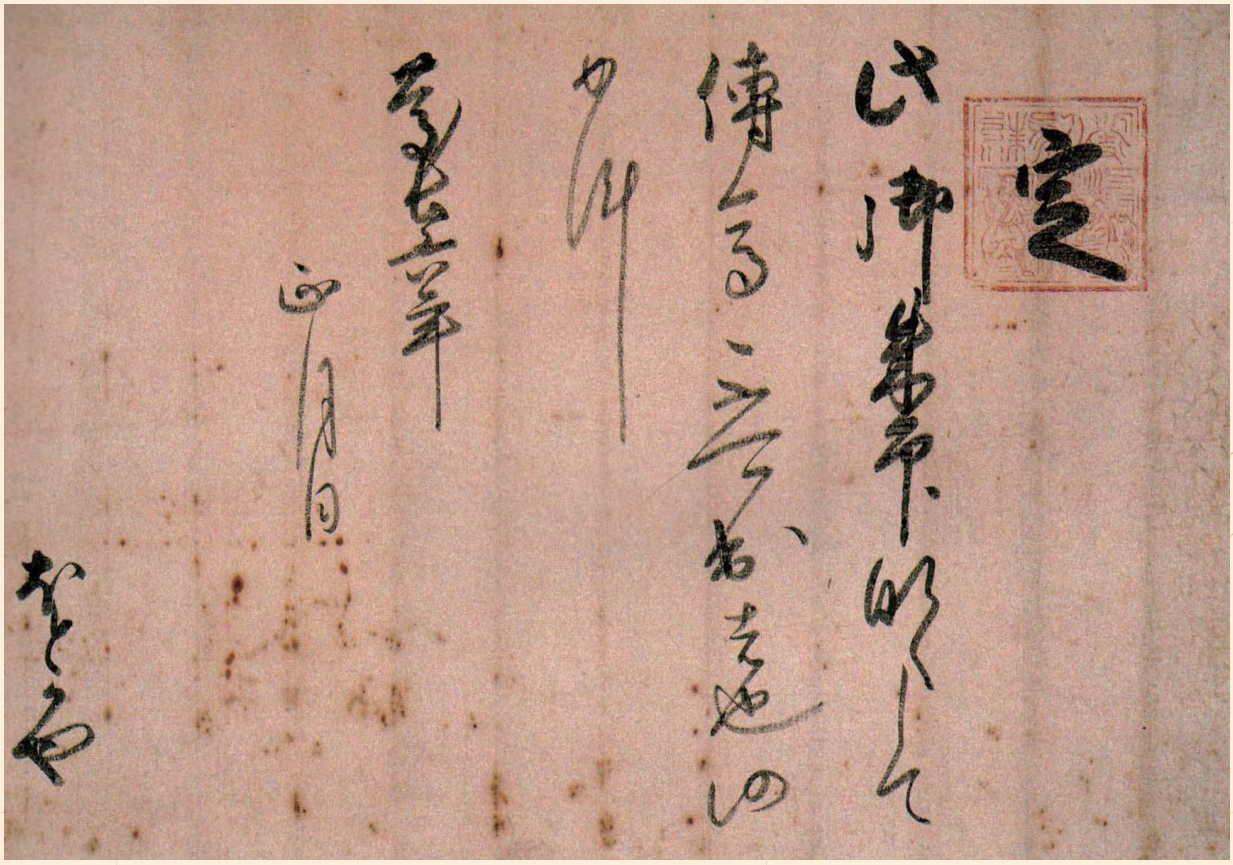
HODOGAYA OPEN HERITAGE

徳川幕府より伝馬の朱印状を得て、旧東海道保土ケ谷宿において大名の宿泊、休憩場所である保土ケ谷本陣を代々運営してきた軽部家の本陣跡に建つ建物。主屋・門・蔵が残る。

【主屋】小規模な洋館が附属していた洋館付き住宅であったが、終戦後進駐軍より住居の規模や格式を縮小する旨の指導がなされ、洋館部分を解体したと伝えられている。洋館付き住宅の典型的な間取りを持つ。

【門】「冠木門」（かぶきもん）と呼ばれていた。かつての本陣建築の通用門であったと伝えられる。

【蔵】関東大震災直前に建築された鉄筋コンクリート造の蔵で、補強と床組みに木造と鉄骨を併用した建築である。当時最先端の技術を駆使して建築した土蔵風鉄筋コンクリート造の耐震耐火建築として注目される。



伝馬ノ朱印状（保土ヶ谷本陣文書NO2）

定

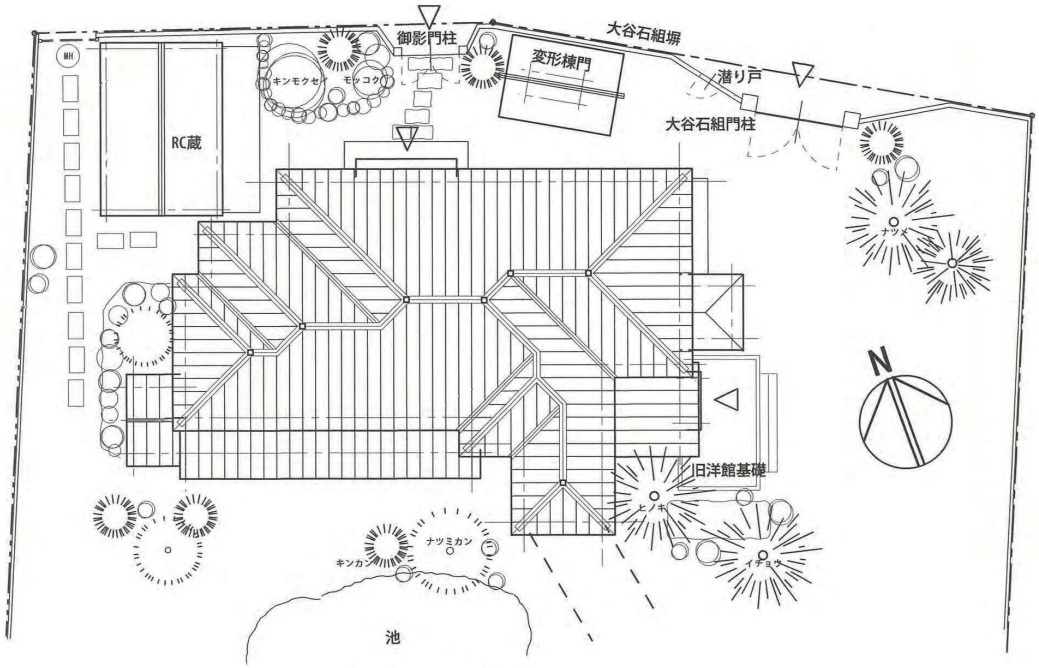
此御朱印那くして
傳馬不可出者也仍
如件

慶長六年
正月日

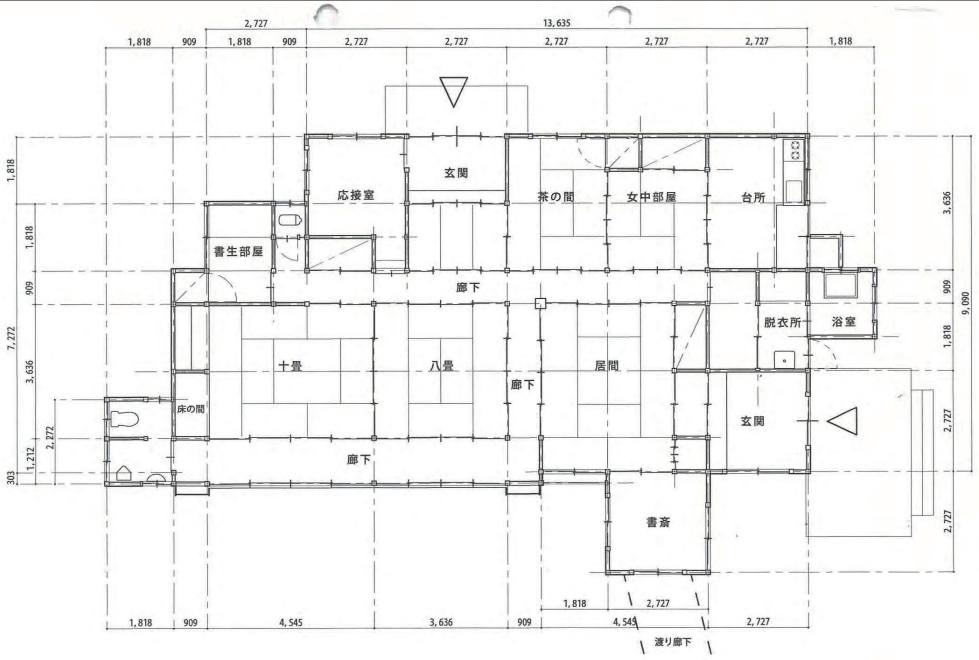
本と可や

駒曳朱印
上の「定」の上に捺印

軽部本陣跡　軽部家住宅主屋

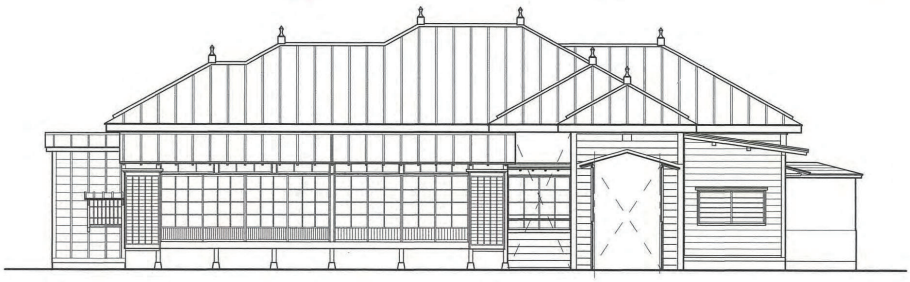


配置・外構図　S＝1：150

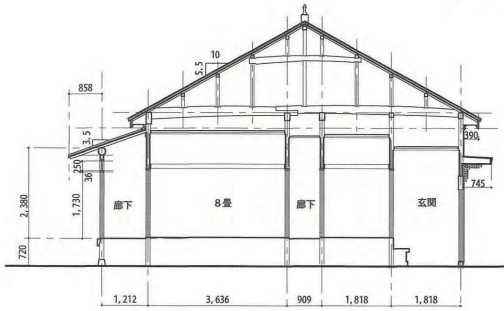


平面図　S＝1：100

軽部本陣跡　軽部家住宅主屋



南立面図　S＝1：100



断面図　S＝1：100

東立面図　S＝1：100

旅籠本金子屋跡

江戸末期～明治初期建築・推定／木造２階建
旅籠（旅館）建築

保土ケ谷宿の旅籠として残る建物。

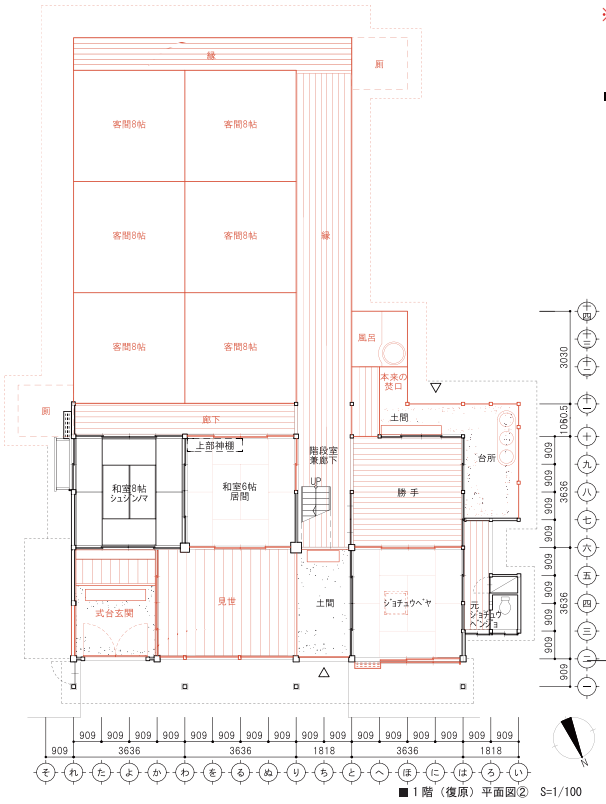
本金子屋は保土ケ谷宿の平旅籠として明治18年まで営業していた記録があるが、明治20年の国鉄東海道線の開通に伴い、宿場の機能が徐々に失われてゆき廃業したと伝えられる。

寄棟造、銅版葺の屋根は当初は茅葺であった。建物正面に木格子を設えるが、これは後設のもの。軸組み材の多くがケヤキで構成され、正面の大梁は松材。表門の門扉を建物正面に埋め込んでいる様式が非常にユニークである。正面中央には揚戸（あげど）があり、2階の腰部分にすり上がり収納されることによって、ミセ（旅籠の宿泊客を向かえる空間）を大きく開放できる構造になっている。江戸末期の記録に畳総数88畳とある。

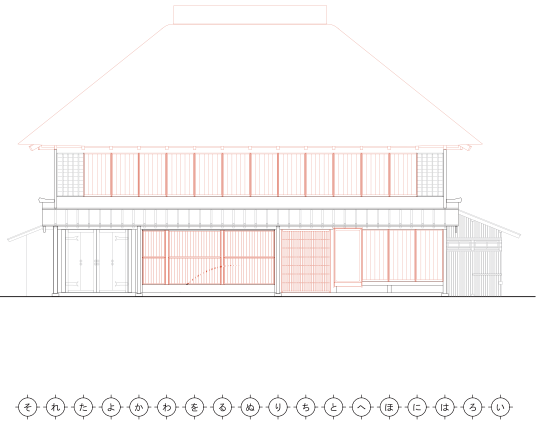
※ 赤線部分は創建当初を推定復元した形状

■立面

・各丸太小屋梁先端部全てに、扠首を差し込む為の傾ぎホゾ穴の痕跡があるため、当初は寄棟合掌の茅葺屋根であったと推察される。二重梁の端部にも、傾ぎホゾ穴の痕跡がある。
・勇氏の記憶によると戦時中の昭和 15 年（1940）に屋根の銅板を総供出し、鉄板葺に葺替えていたが、近年になって再び銅板に葺き戻したそうである。（登記簿によると、昭和 63 年に亜鉛メッキ鋼板葺きとある。）
・戦前に茅葺から銅板葺に小屋替えしたものと推定される。



■ 1 階（復原）平面図② S=1/100



復原した一里塚と松並木・上方見附

平成 17 年復元
一里塚／松並木／上方見附

平成17年12月、横浜市の事業である第1回「ヨコハマ市民まち普請事業」に選ばれ、平成19年2月、市民の手で一里塚と松並木が復元された。

一里塚は実物の約1/3の大きさで、塚の上には昔のように榎（えのき）を植え、宿場の入口のサインである見附や旧東海道沿い全般に植えられていたといわれる松並木とともに宿場時代の景観が再現された。毎年正月は箱根駅伝の応援スポットとして多くの市民で賑わう。

東洋電機製造跡
日本金属工業跡

大正7（1918）年～不詳
昭和7（1932）年～不詳

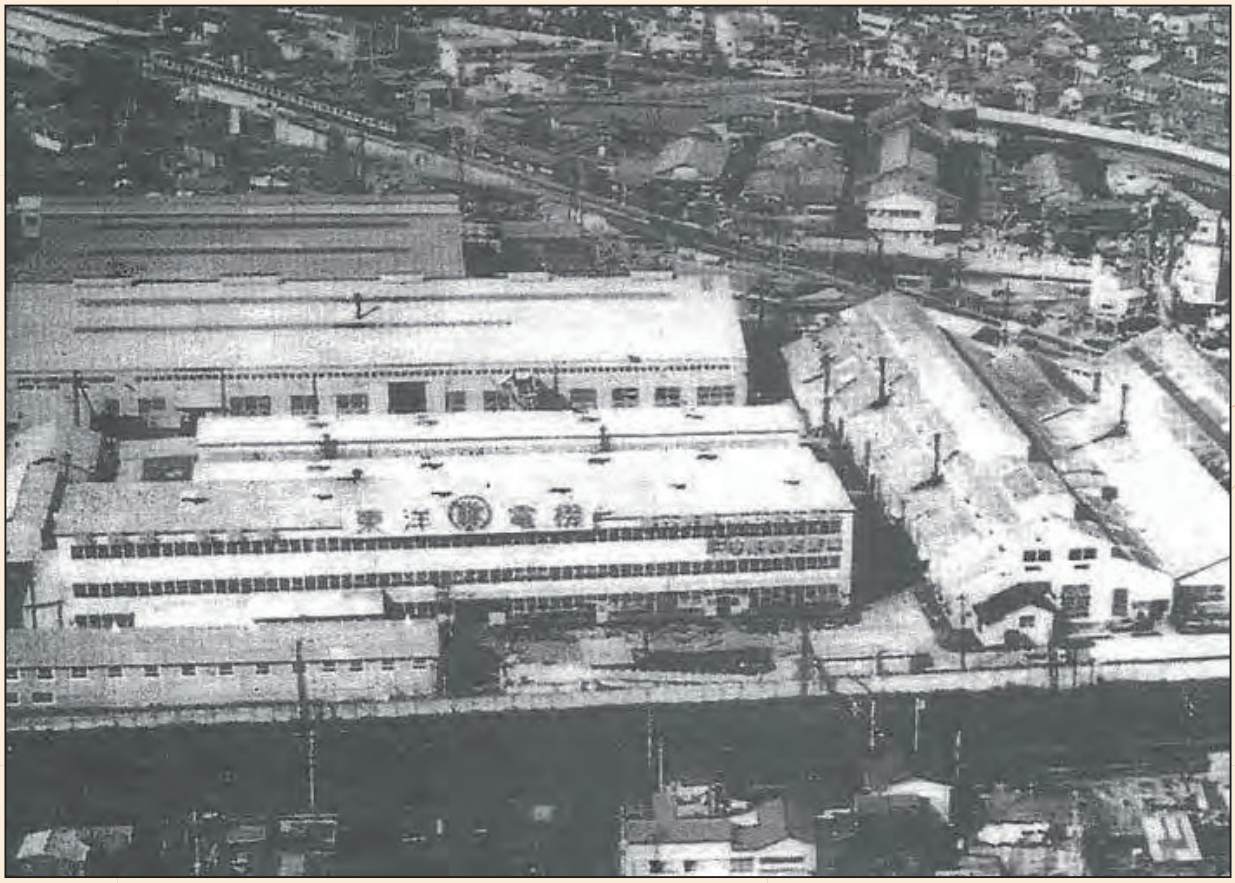
東洋電機製造

大正7（1918）年設立。当時、機械類は殆ど英・独・米からの輸入品で、第一次世界大戦後は輸入物資がままならず、鉄道車両用電気機器の国産化の使命を帯びて設立され電車のモーターを国産化した企業である。小型電気機関車、電車客車両も製造、国産初のディーゼル電動車を相鉄に納入している。また電車のパンタグラフやトロリーバス用の機器など電気機械を次々と開発した。工場の立地条件として、製品の車両を移動させる引込線が保土ケ谷駅に直結して今も残されている。昭和60年金沢区福浦に移転。この土地は以前は南北石油の製油所であった。

日本金属工業

昭和7（1932）年、ステンレス鋼の製造を目的として設立。日本初のステンレスの製造を手がけた専門メーカーです。ステンレスは、戦前から船などに有効に使われていた。工場跡地の高層住宅団地の入口の植え込みに「ステンレス鋼発祥の地」の記念碑がある。

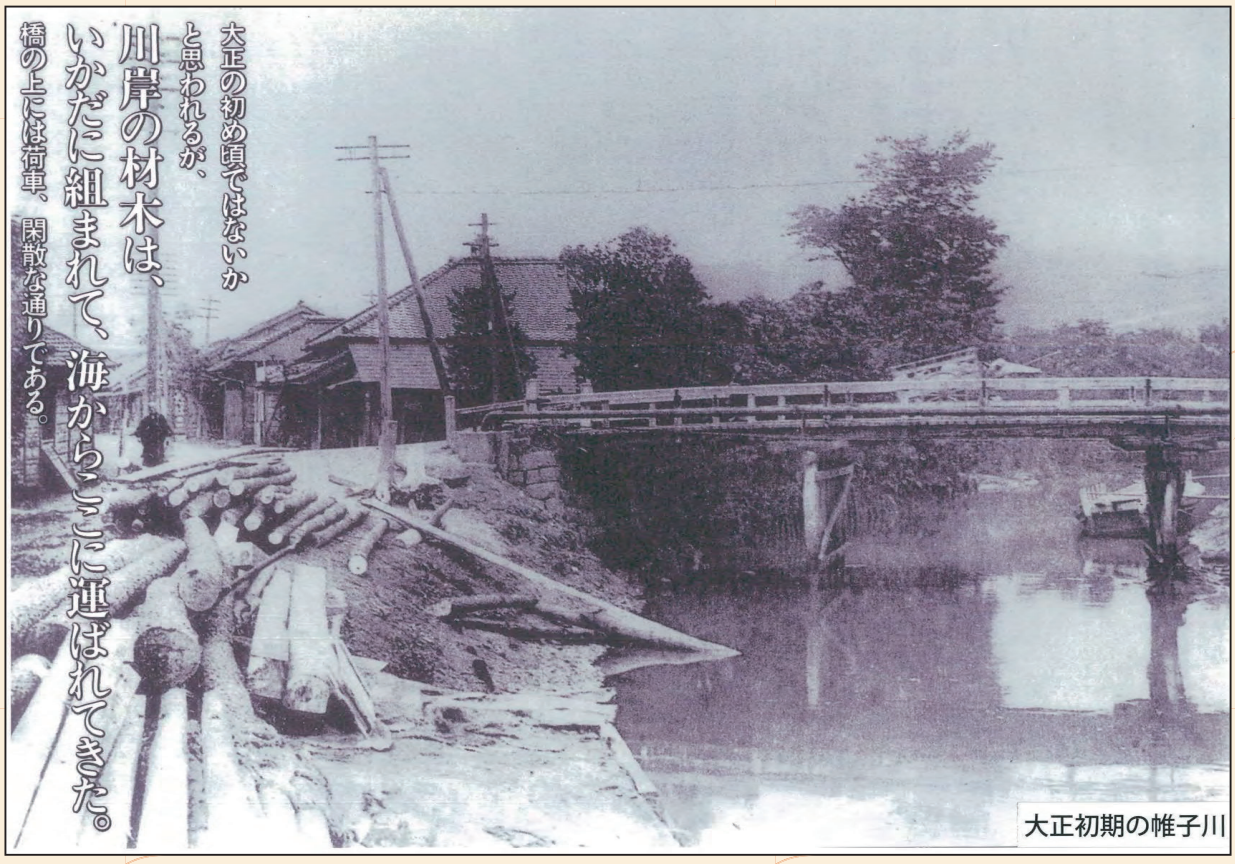
東洋電機製造跡
日本金属工業跡 -2



旧帷子橋跡

建設年不詳
市登録地域史跡名勝天然記念物
［平成10（2008）年11月］

安藤広重など保土ケ谷宿を描く多くの浮世絵に描かれている帷子橋。昭和39年の帷子川の改修以前に掛かっていた帷子橋が現在の天王町駅前公園にモニュメントとして復元されている。

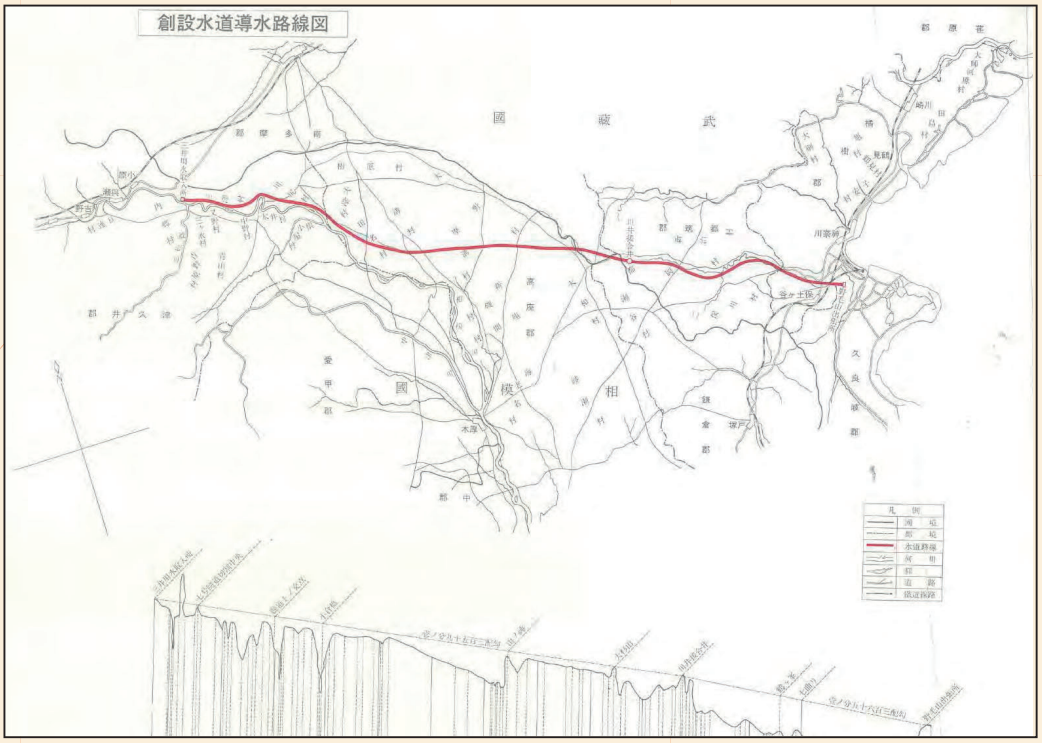


大正初期の帷子川

水道道跡

明治20（1887）年

明治20（1887）年に敷設された近代水道の遺構、水道道（すいどうみち）と呼ばれる。イギリス人土木専門家のヘンリー・パーマーの設計で、津久井の水源から西谷—星川—天王町—藤棚—西戸部を通り43キロに渡り関内の横浜居留地まで給水され、日本初の近代水道と近代消防の歴史の第一歩を創った。天王町のこの通りは戦前において保土ケ谷随一の繁華街で「保土ケ谷座」などの映画館も多く建ち並び大変賑わいを見せていた。周辺の工場の資材を運ぶためのトロッコ道も敷設されていた。


創設水道導水路線図
國
藏
武
國
模
相

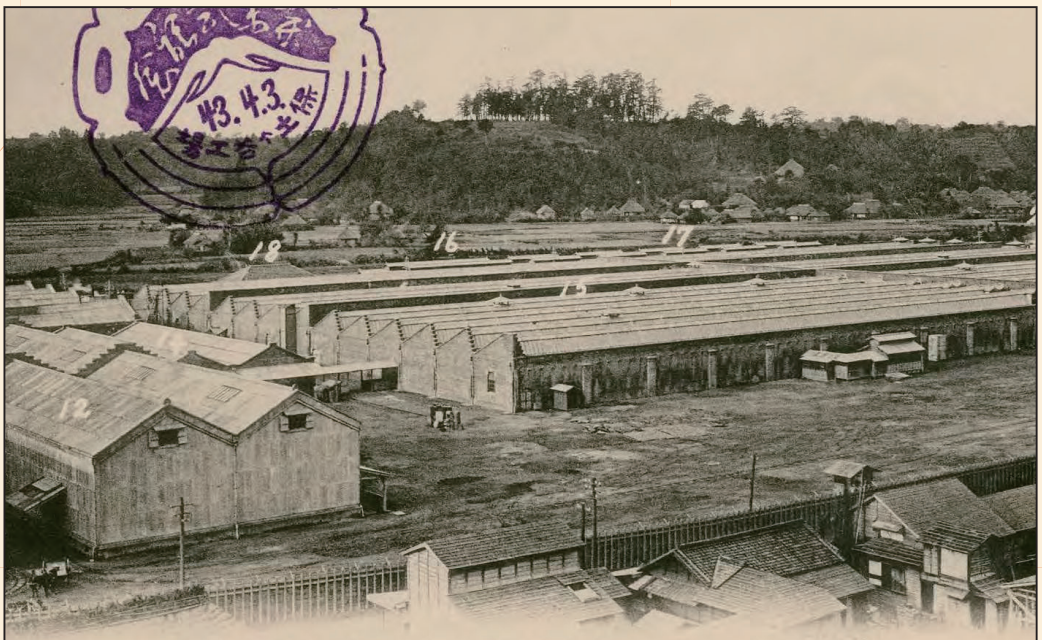
富士瓦斯紡績跡

明治36（1903）年～昭和20（1945）年

富士瓦斯紡績（ふじがすぼうせき）は明治36（1903）年に保土ケ谷区の天王町（現在のイオン周辺）に創業し、1920年（大正9年）頃に最盛期を迎え、従業員6,000名を超える世界最大級の生産量を誇る製糸工場として稼働した。昭和20（1945）年の空襲で操業停止し、戦後は米軍に接収。電力は自家発電で峯水力発電所（酒匂川水系）に設け、明治43（1910）年に供給を開始、余剰電力を周辺工場に安価で供給していた。工場の表門周辺は現在はイオン天王町店の店舗入口となっている。

■横浜シルクロードの賑わい場

富士瓦斯紡績で働く女工などの日常の生活必需品をすべて揃えていたのが、表門から延びる現在の天王町商店街（通称「シルクロード天王町」）の起源といわれている。商店街は工員のみならず周囲から若者が集まる憩いの場所だった。特に家具を扱う店舗が多くあり、若い女工さんが結婚する際には、この商店街で家具一式を調達できるように会社が面倒を見たようだ。映画館なども建ち並び、焼きそばや今川焼きを食べ映画を見て一日楽しむ場所であった。戦前において保土ケ谷随一の繁華街となった天王町商店街のメインストリートは、現在でも「表門通り」と呼ばれ地域の歴史を偲ばせている。



〔二其〕 場工谷ヶ土保社會式株績紡斯瓦士富

程谷曹達（保土ケ谷化学）跡

大正5（1916）年～昭和48（1973）年

大正5（1916）年、程谷曹達（株）創設。当初は苛性ソーダ、金属ソーダから始まり塩素利用の無機塩化物から有機合成へ進み、染料、医薬局、圧縮ガスなどの生産品目を増やしていった。

昭和9（1934）年、傍系の東洋曹達と合併し、総合化学メーカーとして昭和14（1939）年に保土谷化学工業と改称した。戦時中は軍需に重点を置いたが、戦後は平和産業に再転換し、染料、医薬局の生産を再開した。創業時より、住民との間で環境、公害問題でトラブルがあり、早くも昭和48（1973）年には工場を郡山に移転させた。後に跡地から水銀が検出され、高層住宅を建設の際に大量の土質の改良がなされた。

晴れがましい出来事としては、昭和4（1929）年8月19日、横浜の上空にドイツの飛行船「ツェッペリン号」が現れた。霞ケ浦の海軍飛行場で水素ガスを補給して、太平洋横断に米国へ出航して行った。このとき大量のガスを供給したのが、程谷曹達の技術員だった。

大日本麦酒（日本硝子）跡

明治40（1907）年～昭和60（1985）年

元は東京麦酒という会社が明治28（1895）年に保土ケ谷の神戸に進出し、明治40（1907）年にビール会社の大手である大日本麦酒に買収され、ビールと清涼飲料水「リボンシトロン」を製造したことに始まる。しかし、この工場でビールを造っていたのは僅か2年足らずであった。工場敷地南側から月見台へ続く急坂は、この工場にちなんで「ビール坂」の愛称で呼ばれている。大正5（1916）年に隣地に日本硝子工業保土ケ谷工場が設立され、ビール瓶、サイダー瓶を自動製瓶機で生産していた。わが国初の「王冠栓」もここで発案された。その後、両者は合併、分離を繰り返すが、戦時中は不要不急の産業とされ生産は減少した。戦後は「日本硝子」として専らピンの製造に特化する。また、近隣の星川から仏向町にかけての丘陵地から、ガラスピンの主要原料である珪砂が採掘されたことにより、戦前まで星川小学校の裏山付近からトロッコの引込線（トロッコ道）で

工場に搬入していた。星川小学校や川島小学校の裏山、校庭などには珪砂を掘った跡が残っている。また、唯子川からは、港から原材料や製品を輸送するハシケの専用船着き場も作られ、広い敷地には空びんを台形に積み上げた山や、再生する割れたガラスの山が見られて壮観であった。日本硝子は昭和60（1985）年に閉鎖、埼玉県熊谷市に移転し、その跡地は殆どが、横浜ビジネスパークとしてのオフィス街とその周辺に野村総研の研修所、レストラン街、保土ケ谷スポーツセンター、そして保土ケ谷小学校用地として活用されている。

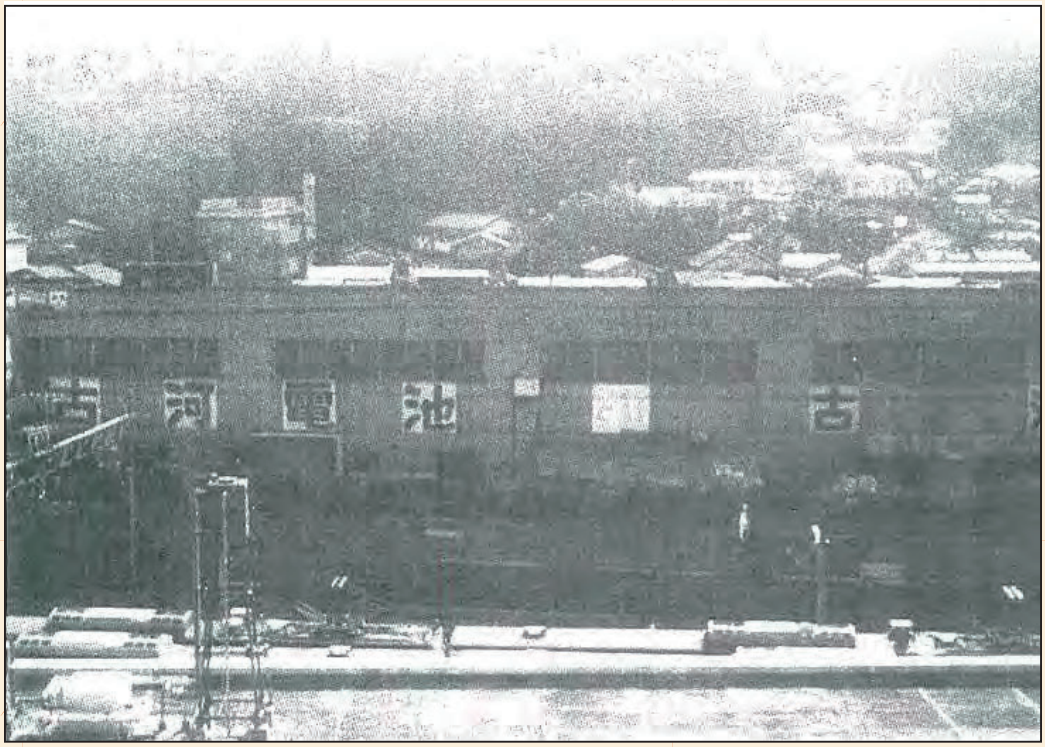
古河電池跡

昭和12（1937）年～昭和61（1986）年

古河電気工業（株）が事業拡大にあたり、電池製作部門を関東に進出すべく、保土ケ谷に工場を建てたのが昭和12年であった。

昭和25年に蓄電池部門が分離独立して「古河電池（株）」となる。

昭和61年にいわき市、今市市に工場移転。跡地は細長い土地であるが、星川駅前に本社ビルを建て、その他は相鉄に売却して、高層マンション、いなげや、へそ広場として活用されている。



杉浦邸

昭和４～５年頃建築
木造平屋建／洋館付き住宅

平屋建、中廊下式の洋館付き住宅で外観は全洋館様式であるが、内部は洋室１室の他は和室となっている。玄関ポーチの大谷石製の階段と上部の小さい切妻屋根周りの木製の洋風意匠が秀逸である。外壁はかつてはドイツ下見板張り、屋根は赤いスレート葺きだった。基礎は大谷石で積まれている。敷地の外周には同時代の大谷石の土留めが周っている。モダンな平屋建ての洋風意匠と庭が昭和初期の月見台の住宅地景観を偲ばせる住宅である。

井澤邸

昭和11年建築／木造2階建
洋館付き住宅

昭和60年までは内科・小児科の町医者「井澤医院」として営業。洋館部分を待合室として使用しており、地域に親しまれてきた建物。

洋館を囲んで後年に増築2階建てとなり、最も目立つ敷地角にランドマークとして洋館部分を見せている。洋館部分の屋根は半切妻（妻上部に三角状屋根面が付く）施釉フランス瓦葺き。外壁のモルタルは後に吹付タイルに改修されている。2面に付く台形平面の出窓の下側は逆四角錐状に持ち出され、窓の桟組が印象的である。外壁腰部分はモルタル洗い出し仕上げ。

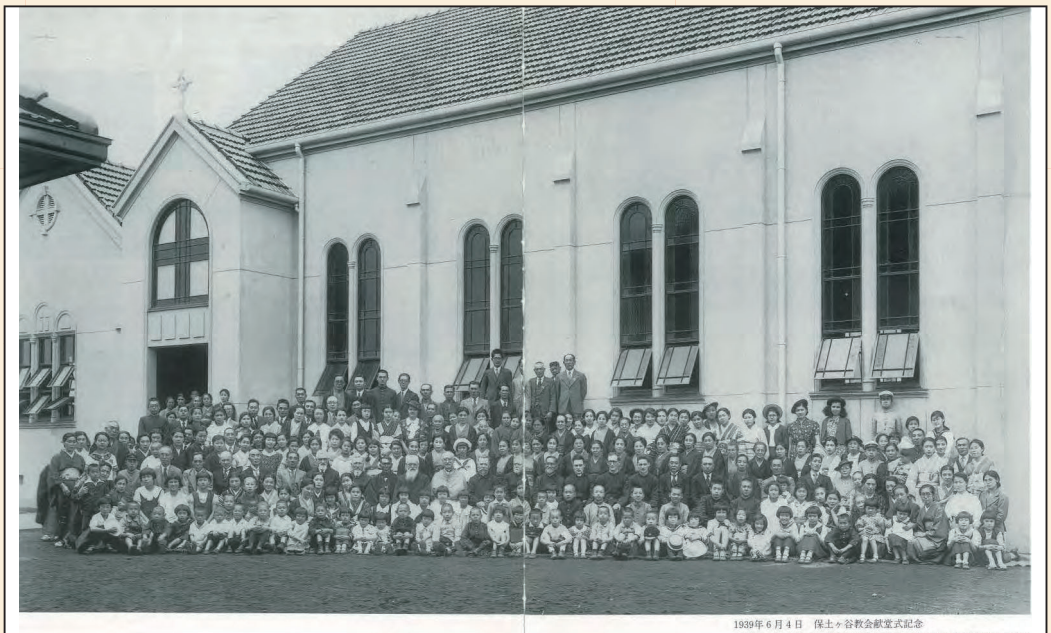
医院時代の写真

保土ケ谷カトリック教会

昭和14年建築
木造2階建／教会建築

パリ外国宣教会フランス人のシェレル神父が私財を投じフランスからステンドグラスなどを取り寄せて建てた教会であると伝えられている。様式はロマネスク風であり、外壁をモルタル塗りで仕上げた質素な意匠で、細かいところまで手の込んだ美しい建物である。

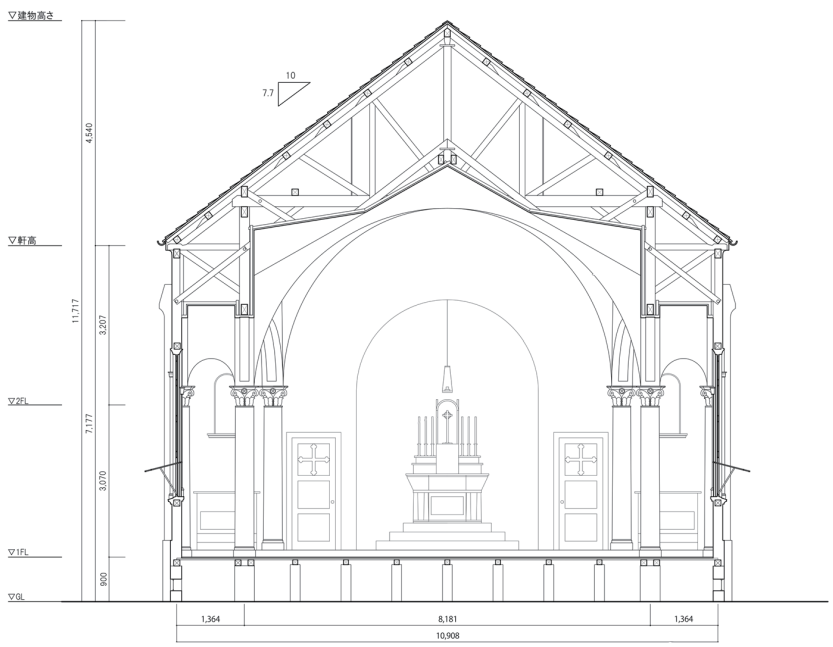
屋根上の十字架は日本では珍しいケルトの十字架。チェコ出身の建築家J.J. スワガーによる設計と言われている。J.J. スワガーは、カトリック山手教会やカトリック豊中教会の設計者としても知られる。

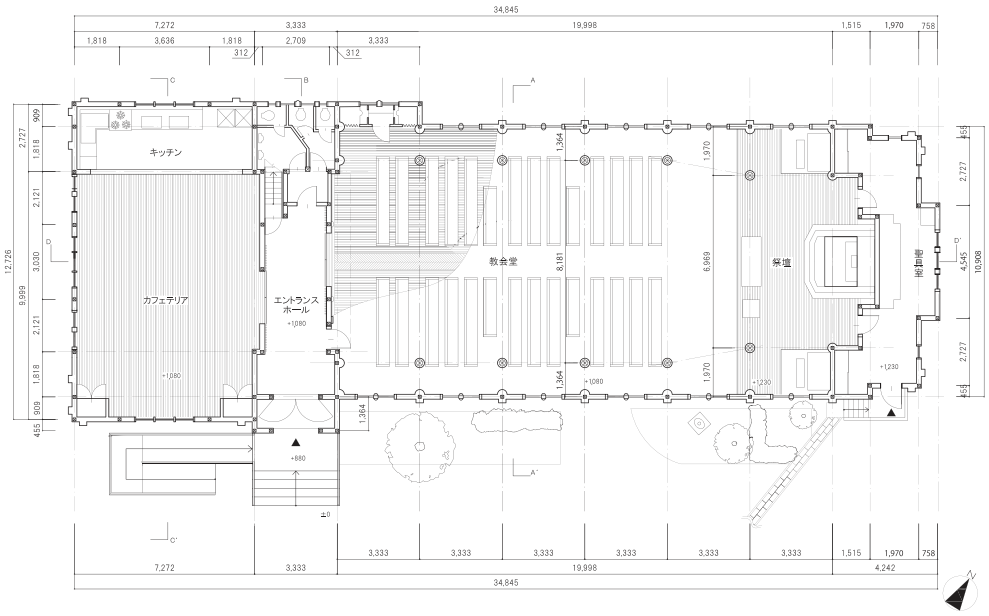


1939年6月4日　保土ヶ谷教会献堂式記念
保土ヶ谷のほか、神田(東京)、山手、若葉町(末吉町)教会の方々

1939年　カンドウ神父出征記念（於山手教会）
シャンボン大司教、シェレル師、ウタン師ほか

歴史まちあるき
— オープンヘリテイジ —
保土ケ谷カトリック教会 -3





入澤邸

昭和9年建築
木造2階建／洋館付き住宅

洋館は切妻を正面に見せず横向きとした配置が珍しい。

洋館の屋根は施釉フランス瓦葺き。立物とパルメット（ナツメヤシの葉を紋様化した唐草紋様）模様の巴（ともえ）瓦が棟飾に載る。外壁はモルタル吹付タイル。出窓付き、掃出し窓は改変されている。内部は玄関前室（2畳）の脇に造りの良い二間続き間を設え、広縁の天井には戦時中の焼夷弾の跡が残る。

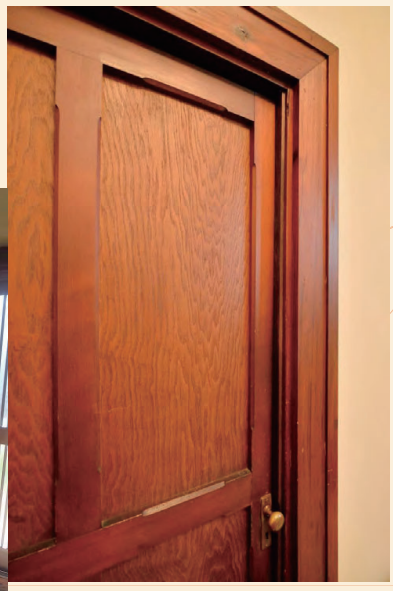
2015/2/25

2015/2/25

小菅邸

昭和6年建築
木造平屋建／洋館付き住宅

昭和9年子供の就学を機に、南区の六ッ川より現地に移築した珍しい経歴を持つ建物。近年外部を改修した。屋根は切妻と入母屋の複合型。瓦成形スレート葺き。洋館は窯業系サイディング張り。窓は両開き鎧戸付き上げ下げ窓にモロッコ硝子が入る。洋館内部は6畳間、天井壁共漆喰仕上げ、蛇腹付天井廻り縁。



斎藤邸

昭和9年建築
木造2階建／洋館付き住宅

現当主の父によって建築。地盤改良のため松杭を約50本打ったとされる。洋館屋根は切妻でコロニアル葺き、板金製フィニュアル付き。外壁は当初材の珍しい赤色の人造石洗い出し、腰は御影石洗い出し。上げ下げ窓の出窓、窓の桟組がレトロで結霜硝子とダイヤ硝子でパターン化されている点が見どころ。洋間は6帖で天井壁共に漆喰仕上げ、照明中央飾り（センターサークル）付き、和館内部は中廊式で続き間の座敷は床の間付き書院造で縁側を配する。築80年経つが狂いもほとんど無く、大工や左官職人が腕を振るった傑作建築である。

三輪邸

昭和２年建築
木造2階建／洋館付き住宅

かつて貿易関係業を営んでいた現当主の祖父により建築。

外観は平屋建て切妻屋根和瓦葺き。外壁は全て下見板張りの和風造りだが、玄関には洋風扉が付き、一部中2階建ての珍しいスキップフロアー構成となっている。玄関の奥に洋間の応接室、その左手に広い洋間があり、和館部分は2間続きの座敷を配し、秀逸な書院造で創建時の形をよく留めている。アプローチには御影石の一本ものの門柱が残る。

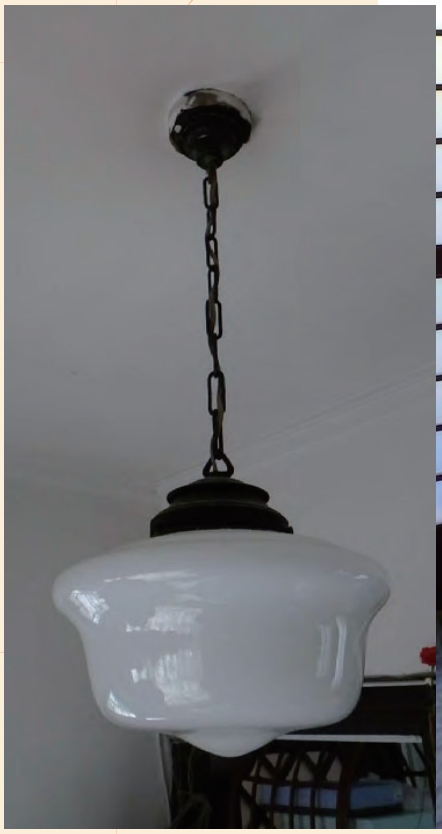
中島邸

大正13年建築
木造平屋建／洋館付き住宅

昭和28年頃増改築して平成17年頃まで旅館業を営んでいた。洋間は3帖、元は玄関踏込より直接入り、洋間の続き部屋とは段差が付いた土間を設えたユニークな洋館であった。玄関先袖壁に洗い出し仕上げの円柱が立つ。

玄関脇の和室は差し鴨居付きの部屋と長押付の続き座敷となる。和洋部ともに一風変わった造りである。洋館外壁は当初材らしきモルタルリシン掻き落とし。出窓にモロッコ硝子（細かい風紋砂模様の型硝子）が入り、洋間は天井壁共に漆喰塗り、漆喰の蛇腹付廻り縁、古い硝子のグローブペンダントが下がる。現在は床を上げ玄関ホールより入り、続き間と一室に改変されている。

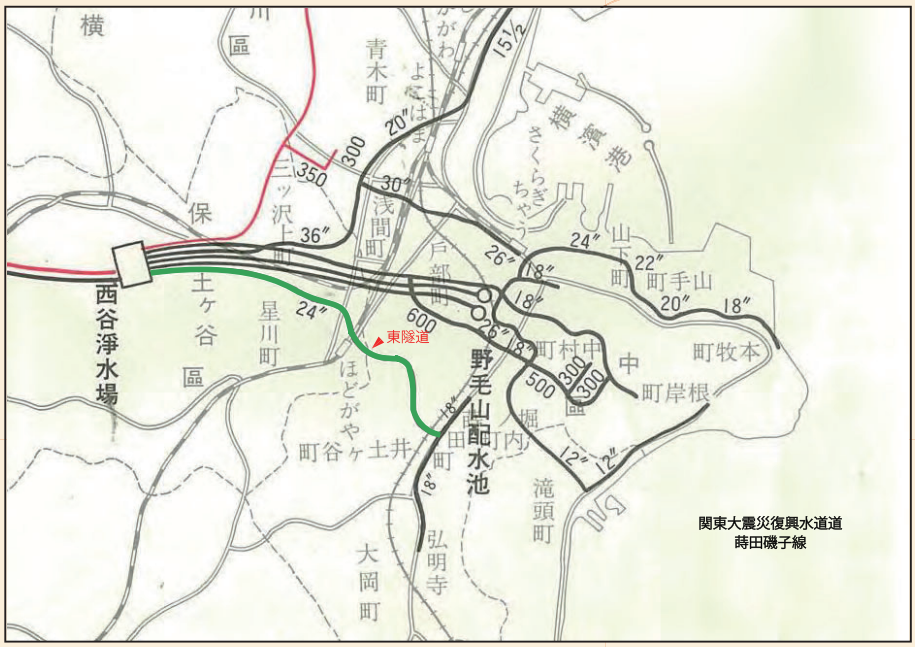
登録



東隧道

昭和５（1930）年／馬蹄型トンネル
市認定歴史的建造物
［平成12（2000）年11月］

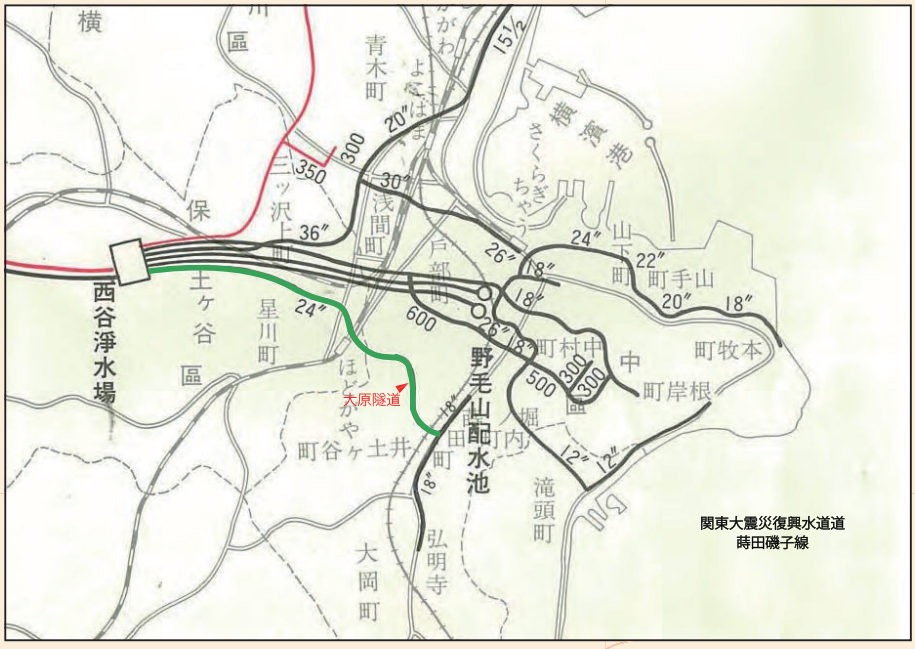
関東大震災復興の際、磯子、岡村、蒔田、大岡方面の配水強化を図るために、保土ケ谷町と南太田町を連絡する道路用トンネルと兼用で計画・整備された。延長168.71m、勾配200分のし、形状は馬蹄形で高さ6.3m、幅5.7mで、内部には口径610mm鉄管及び内径230mmコンクリート排水管を敷設した。外観表面は、梁とトスカナ式の柱部に花開岩、その他はフランス積レンガを張ることにより、梁、柱の構造的なデザインを明確にした優れた意匠となっている。



大原隧道

昭和３（1928）年／馬蹄型トンネル
市認定歴史的建造物
［平成12（2000）年11月］

関東大震災の復興事業の一環として、東隧道とあわせて整備・計画された。延長254.5m、勾配200分の1、形状は馬蹄形で高さ3.62m、幅2.44mで，内部には口径610mm鉄管を敷設した。当初は管理用だったが、現在は歩行者用通路としても利用されている。外観表面のデザインは東隧道に類似しており、小さいながらも重厚さの失われていない存在感のあるトンネルとなっている。



北向地蔵

享保2（1717）年
市登録地域有形民俗文化財
［平成元（1989）年12月］

その昔、この付近で、道に迷った旅の僧が途方に暮れていると、近くの寺の住職が現れて寺に泊めてくれた。住職が言うには「道に迷って困っている僧がいるので救いに行くように」と夢の中で地蔵に告げられたとのことだった。それを知った旅の僧は、地蔵に対する感謝と旅の安全を願う気持ちから、自分の持ち物を寄進して、北（江戸）を向いた地蔵を建立したと伝えられる。その後、修繕の時などに地蔵の向きを変えても、いつの間にか北向きに戻っているので「北向地蔵」と呼ばれるようになったそうである。

地蔵が見守るこの道は「かなさわかまくら道」として古くから多くの人に利用されてきた。ここは「かなさわかまくら道」の分岐点であり、地蔵の角柱には「是より左の方かなさわ道」「是より右の方くめう寺道」と刻まれ、金沢方面と弘明寺方面への道案内も兼ねていた。

御所台の井戸

建設年不詳
市登録地域史跡名勝天然記念物
［平成3（1991）年11月］

征夷大将軍となった源頼朝が鎌倉に幕府を開くと、関東諸国の御家人が鎌倉に駆けつけるための道（かまくらみち）が各地に作られた。区内には、保土ケ谷税務署脇から横浜清風高校（旧明倫高校）方面へ向かう「かなさわかまくら道」がある。その途中の急な坂道（磐名いわな坂）沿いのひっそりとした一角が政子の井戸とも呼ばれる「御所台（ごしょだい）の井戸」である。

政子とは、頼朝の妻で、頼朝の死後に実質的に将軍の仕事を行い「尼将軍」と呼ばれた北条政子のこと。この井戸の水を政子が化粧に使ったという言い伝えがあり、この一帯が政子の所領する土地だったのではないかという説もある。

江戸時代以降でも、天皇や将軍が保土ケ谷宿の軽部本陣に立ち寄ったときには、この井戸の水が料理に使われたと伝えられる。昭和の初めごろまで、このあたりには清水が流れていたそうで、「尼将軍政子の井戸はあふれいて朝（あした）涼しく蟹あそぶなり」という詩も残っている。

北向地蔵

享保2（1717）年
市登録地域有形民俗文化財
［平成元（1989）年12月］

その昔、この付近で、道に迷った旅の僧が途方に暮れていると、近くの寺の住職が現れて寺に泊めてくれた。住職が言うには「道に迷って困っている僧がいるので救いに行くように」と夢の中で地蔵に告げられたとのことだった。それを知った旅の僧は、地蔵に対する感謝と旅の安全を願う気持ちから、自分の持ち物を寄進して、北（江戸）を向いた地蔵を建立したと伝えられる。その後、修繕の時などに地蔵の向きを変えても、いつの間にか北向きに戻っているので「北向地蔵」と呼ばれるようになったそうである。

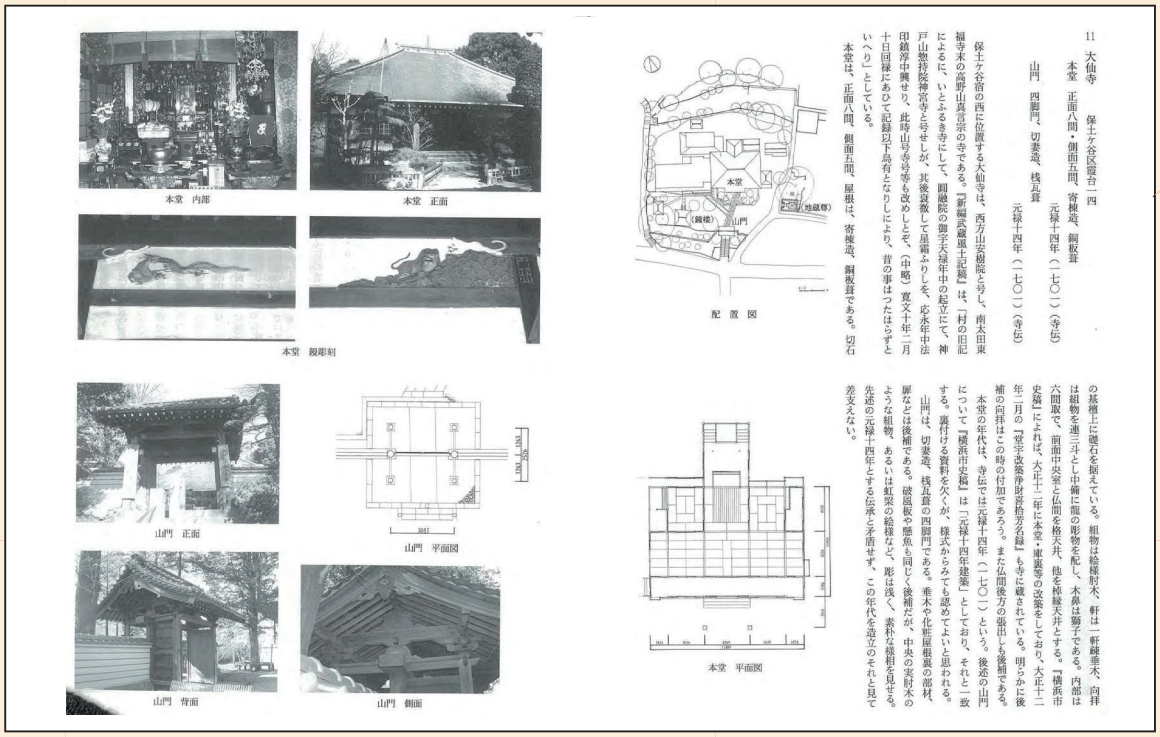
地蔵が見守るこの道は「かなさわかまくら道」として古くから多くの人に利用されてきた。ここは「かなさわかまくら道」の分岐点であり、地蔵の角柱には「是より左の方かなさわ道」「是より右の方くめう寺道」と刻まれ、金沢方面と弘明寺方面への道案内も兼ねていた。

大仙寺（本堂・山門）

元禄14年（1701年）推定
木造平屋建／寺院建築

高野山真言宗の寺院。かつては旧東海道（現在の国道1号）まで参道が通じていたが、明治19年に参道を国鉄が横切る形で開通し現在は踏切が設置されている。本堂は寄棟造、銅版葺で切石の基壇に基礎石を据えている。内部の中央室と仏間は格天井となっている。

山門は切妻屋根、瓦葺の四脚門。屋根裏中央の肘木組物や虹梁（こうりょう）の絵様は元禄の頃のものであると想定されている。



11　大仙寺　保土ケ谷区岡沢台二四

本堂　正面八間・側面五間、寄棟造、銅板葺
元禄十四年（一七〇一）（寺伝）

山門　四脚門、切妻造、桟瓦葺
元禄十四年（一七〇一）（寺伝）

保土ケ谷宿の西に位置する大仙寺は、西方山安穏院と号し、南太田東福寺末の高野山真言宗の寺である。『新編武蔵風土記稿』は、「村の旧記によるに、いとふるき寺にして、圓融院の御宇天禄年中の起立にて、神戸山惣持院神宮寺と号せしが、其後衰微して風霜ふりしを、応永年中法印鎮淳中興せり、此時山号寺号等も改めしとぞ、（中略）寛文十年二月十日回禄にあひて記録以下烏有となりしにより、昔の事はつたはらずといへり」としている。

本堂は、正面八間、側面五間、屋根は、寄棟造、銅板葺である。切石の基礎上に礎石を据えている。組物は絵様肘木、軒は一軒疎垂木、向拝は組物を連三斗とし中備に龍の彫物を配し、木鼻は獅子である。内部は六間取で、前面中央室と仏間を格天井、他を桟縁天井とする。『横浜市史稿』によれば、大正十二年に本堂・庫裏等の改築をしており、大正十二年二月の『堂宇改築浄財寄捨芳名録』も寺に蔵されている。明らかに後補の向拝はこの時の付加であろう。また仏間後方の張出しも後補である。

本堂の年代は、寺伝では元禄十四年（一七〇一）という。後述の山門について『横浜市史稿』は「元禄十四年建築」としており、それと一致する。裏付ける資料を欠くが、様式からみても認めてよいと思われる。

山門は、切妻造、桟瓦葺の四脚門である。垂木や化粧屋根裏の部材、扉などは後補である。破風板や懸魚も同じく後補だが、中央の実肘木のような組物、あるいは虹梁の絵様など、貶は浅く、素朴な様相を見せる。先述の元禄十四年とする伝承と矛盾せず、この年代を造立のそれと見て差支えない。

帷子会館

大正初期建築
木造平屋建／近代洋風

当初は消防署の消防車を収納していた建物。現在は町内会館として利用されている。切妻屋根妻入り。

間口3間ほど、棟にレトロ感漂う板金製フィニュアルを載せ、印象的な妻壁のアーチ付き換気ガラリが二つ並び、木組の腕木に支えられた庇が付く。扉や窓は後に改修されたものだが、大正期の建物として旧東海道沿いに残る稀有な洋風建物である。歴史的建造物の良い保存活用例といえる。